

# 往診依頼の緊急度の判断や 訪問看護師への指示に活用

医療法人元気会 わかさクリニック (埼玉県所沢市)

——導入の経緯を教えてください。

**間嶋** ビデオ通話を通じて患者さんの状態を確認することで、往診依頼の緊急度を見極めるなど、在宅診療の効率性を高めるうえで役立つのではないかと導入しました。これまで、特に皮膚科の領域で、「ぶつぶつがたくさん出てきたので、すぐに来てください」と、深夜に往診依頼がくるケースがよくありました。行ってみると、手の甲にプツツと1つ、湿疹があるだけの場合もあります。もちろん、患者さんやご家族が心配され、医師の顔を見ることで安心されることもあるでしょう。ただ、その間に別の往診依頼がくる可能性もあります。医師の数も限られていますので、緊急度を判断する必要性を感じていました。

——実際の活用方法を教えてください。

**間嶋** 夜間の当直の医師に「ポケットドクター」をインストールしたiPadを渡しています。往診の依頼は、特に介護施設や高齢者住宅の患者さんからが多いです。夜間は看護師さんが不在になるケースもあり、介護職員が不安になって電話をかけてくるのです。そういった際には、まずビデオ通話を通じて患者さんの状態を確認します。緊急度が低いと判断した場合は、「しばらく様子を見ましょう。場合によっては明日往診に向かいますので、また連絡をください」などの対応を行っています。

また、訪問看護師が在宅の患者さんをサポートしながら、電話再診の代わりとしても活用しています。しっかりと患者さんの表情や褥瘡などの患部を確認することができるので、訪問看護師に対しても適切な指示を与えることができます。

——今後の可能性についてはいかがですか。

**間嶋** かかりつけ医という観点から言うと、忙しくて通院できない患者さんなどに対して、患者サービスを向上させる役割としても期待しています。たとえば、花粉症や高血圧など、服薬継続のために定期的な通院が必要なケースがあります。通院がネックで治療が中断するのであれば、遠隔診療で治療継続を図ることは患者さんにとってもいいことだと思います。今後、バイタルデータに加えて、心臓音や心雑音が波形になって表示されるなど、客観的なデータが増えることで可能性は広がっていくと思っています。



**間嶋 崇**

医療法人元気会  
わかさクリニック  
理事長・院長

バイタルデータに加えて、心臓音や心雑音が波形になって表示されるなど、客観的なデータが増えることで可能性は広がっていくと思っています。